

東京小品

芥川龍之介

青空文庫

鏡

自分は無暗^{むやみ}に書物ばかり積んである書齋の中に蹲^{うづくま}つて、寂しい春の松の内を甚^{はなはだ}だらしく消光してゐた。本をひろげて見たり、好^いい加減な文章を書いて見たり、それにも飽きると出たらめな俳句を作つて見たり——要するにまあ太平の逸^{いつみん}民らしく、のんびんだらりと日を暮してゐたのである。すると或日久しぶりに、よその奥さんが子供をつれて、年始^{かたがた}旁々遊びに來た。この奥さんは昔から若くつてゐたいと云ふ事を、口癖のやうにしてゐる人だつた。だからつれてゐる女の子がもう五つになると云ふにも関^{かかは}らず、まだ娘の時分の美しさを昨日^{きのふ}のやうに保存してゐた。

その日自分の書齋には、梅の花が活^いけてあつた。そこで我々は梅の話をした。が、千枝^{ちえ}ちゃんと云ふその女の子は、この間^{あひだぢう}中書齋の額^{がく}や掛^{かけもの}物を上^{うはめ}眼でぢろぢろ眺めながら、退屈^{しぱら}さうに側に坐つてゐた。

暫^{しばら}くして自分は千枝ちゃんが可哀^{かはい}さうになつたから、奥さんに「もうあつちへ行つて、母とでも話してお出でなさい」と云つた。母なら奥さんと話しながら、しかも子供を退屈

させない丈^{だけ}の手腕があると思つたからである。すると奥さんは懷^{ふところ}から鏡^{かがみ}を出して、それを千枝ちゃんに渡しながら「この子はかうやつて置きさへすれば、決して退屈しないんです」と云つた。

何故^{なぜ}だらうと思つて聞いて見ると、この奥さんの良人^{をつと}が逗子^{づし}の別荘^{やまい}に病を養つてゐた時分、奥さんは千枝ちゃんをつれて、一週間に二三度宛東京逗子間を往復したが、千枝ちゃん^{ちえ}は汽車の中でその度に退屈し切つてしまふ。のみならず、その退屈を紛^{まぎ}らしたい一心で、勝手な悪戯^{いたづら}をして仕方がない。現に或時はよその御隠居様^{ごいんきよ}をつかまへて「あなた、仏蘭西語^{フランス}を知つていらつしやる」などとてもない事を尋ねたりした。そこで奥さんも絵本を渡したり、ハモニカをあてがつたり、いろいろ退屈させない心配をしたが、とうとうしまひに懷鏡^{ふところかがみ}を持たせて置くと、意外にも道中^{だうちう}おとなしく坐つてゐる事實を発見した。千枝ちゃんはその鏡を覗^{のぞ}きこんで、白粉^{おしろい}を直したり、髪を搔^かいたり、或は又わざと顔をしかめて見り、鏡の中の自分を相手にして、何時^{いつ}までも遊んでゐるからである。奥さんはかう鏡を渡した因縁^{いんねん}を説明して、「やつぱり子供ですわね。鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんですから。」とつけ加へた。

自分は刹那^{せつな}の間^{あひだ}、この奥さんに軽い悪意を働かせた。さうして思はず笑ひながら、こん

な事を云つて冷評した。^{ひやか}

「あなただつて鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんぢやありませんか。千枝^{ちえ}ちゃんとは違ふのは、退屈なのが汽車の中と世の中だけの差別ですよ。」

下足札

これも或松の内の事である。Hと云ふ若い亜米利加人^{アメリカ}が自分の家へ遊びに来て、いきなりポケットから下足^{げそく}札^{ふだ}を一枚出すと、「何^{なん}だかわかるか」と自分に問ひかけた。下足札はまだ木の匂^{におひ}がする程新しい板の面^{おもて}に、俗悪な太い字で「雪の十七番」と書いてある。自分はその書体を見ると、何故^{なぜ}か両^{りやう}国^{こく}の橋の袂^{たもと}へ店を出してゐる甘酒屋^{あまざけや}の赤い荷を思ひ出した。が、元より「雪の十七番」の因縁^{いんねん}なぞは心得てゐる筈^{はず}がなかつた。だからこの蒟蒻^{こんにやく}問答^{もんたふ}の雲水^{うんすゐ}めいた相手の顔を眺めながら、「わからないよ」と簡単な返事をした。するとHは鼻眼鏡^{めがね}の後^{うしろ}から妙な瞬^{またた}きを一つ送りながら、急ににやにや笑ひ出して、「これはね。或芸者^{スヴニール}の記念品^{スヴニール}なんだ。」

「へへえ、記念品^{スヴニール}にしちや又、妙なものを貰つたもんだな。」

自分たちの間には、正月の膳が並んでゐた。Hはちよいと顔をしかめながら、屠蘇の盃へ口をあてて、それから吸物の椀を持つた儘、々としてその下足札の因縁を辯じ出した。

何でもそれによると、Hの教師をしてゐる学校が昨日赤坂の或御茶屋で新年会を催したのださうである。日本に来て間もないHは、まだ芸者に愛嬌を売るだけの修業も積んでゐなかつたから、唯出て来る料理を片つぱしから平けて、差される猪口を片つぱしから飲み干してゐた。するとそこにゐた十人ばかりの芸者の中に、始終彼の方へ秋波を送る女が一人あつた。日本の女は踝から下を除いて悉く美しいと云ふHの事だから、勿論この芸者も彼の眼には美人として映じたのに相違ない。そこで彼も牛飲馬食する傍には時々そつとその女の方を眺めてゐた。

しかし日本語の通じないHにも、日本酒は遠慮なく作用する。彼は一時間ばかりたつ中に、文字通り泥酔した。その結果、殆ど座に堪へられなくなつたから、ふらふらする足を踏みしめてそつと障子の外へ出た。外には閑静な中庭が石燈籠に火を入れて、ひっそりと竹の暗をつくつてゐる。Hは朦朧たる酔眼にこの景色を眺めると、如何にも日本らしい好い心もちに浸る事が出来た。が、この日本情調が彼のエキゾティシズムを満足

させたのは、ほんの一瞬間の事だつたらしい。何故と云ふと彼が廊下へ出るか出ないのに、後を追つてするすると裾を引いて来た芸者の一人が突然彼の頸へ抱きついたからである。さうして彼の酒臭い脣へ潔い接吻をした。勿論それはさつきから、彼に秋波を送つてゐる芸者だつた。彼は大に嬉しかつたから、両手でしっかりとその芸者を抱いた。

ここまでは万事が頗る理想的に發展したが、遺憾ながら抱くと同時に、急に胸がむかつて来て、Hはその儘その廊下へ甚だ尾籠ながら嘔吐を吐いてしまった。しかしその瞬間に彼の鼓膜は「私はX子と云ふのよ。今度御独りでいらした時、呼んで頂戴」と云ふ宛転たる嬌声を捕へる事が出来た。さうしてそれを耳にすると共に、彼は恰も天使の樂声を聞いた聖徒のやうに昏々として意識を失つてしまつたのである。

Hは翌日の午前十時頃になつて、やつと正氣に返る事が出来た。彼はその御茶屋の一室で厚い絹布の夜具に包まれて、横になつてゐる彼自身を見出した時、すべてが恰も一世紀以前の出来事の如く感ぜられた。が、その中でも自分に接吻した芸者の姿ばかりは歴々として眼底に浮んで来た。今夜にもここへ来て、あの芸者に口をかけたら、きつと何を措いても飛んで来るのに違ひない。彼はさう思つて、勢ひよく床の中から躍り出た。が、酒に洗はれた彼の頭脳には、どうしてもその芸者の名が浮んで来ない。名前もわからない芸

者に口がかけられないのは、まだ日本の土を踏んで間もない彼と雖も明白である。彼は床の上に坐つた儘、着換をする元氣も失つて、
「だから、その晩の下足札を一枚貰つて来たんだ。これだつてあの芸者の記念品にや違ひない。」

日はかう云つて、吸物椀を下に置くと、松の内にも似合はしくない、寂しさうな顔をしながら、仔細らしく鼻眼鏡をかけ直した。

漱石山房の秋

夜寒の細い往来を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として乱れてゐる。砂利と落葉とを踏んで玄關へ来ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁と云はず壁板と云はず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉がさつかせて、呼鈴の鈕を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴を押すと、明りのさして

ある障子が開いて、束髪そくはつに結つた女中ひとが一人、すぐに格子戸の掛け金を外はづしてくる。玄関の東側には廊下らうかがあり、その廊下の欄干らんかんの外そとには、冬を知らない木賊とくさの色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸ガラスを洩れる電燈の光も、今は其処そこまでは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊した風鐸ふうたくの影も、反つて濃くなつた宵闇よひやみの中に隠されてゐる位である。

硝子戸ガラスから客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天てんじや

井に斑々はんぱんとまだ残つてゐる。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴ごはづるの毯たんが敷いてあるから、

畳の古びだけは分明ぶんみやうでない。この客間の西側（玄関寄り）には、更紗さらさの唐紙からかみが二枚

あつて、その一枚の上に古色こしよくを帯びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黄色に百合ゆりの

やうな花を繡ぬいつたのは、津田青楓氏つだせいふうか何かの図案らしい。この唐紙からかみの左右の壁際かべぎはには、

余り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつて

ゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鉄格子てつがうしの西洋窓の前に大きな紫檀したんの

机を据ゑて、その上に硯すずりや筆立てが、紙絹しけんの類や法帖ほふてふと一しよに、存外ぞんぐわい行儀ぎやうぎよく

並べてある。その窓を刺した南側の壁と向うの北側の壁とは、殆ど軸の挂かかつてゐなか

つた事がない。蔵沢ざうたくの墨竹ぼくちくが黄興くわうこうの「文章千古事」と挨拶あいさつをしてゐる事

もある。木庵もくあんの「花開万国春」はなひらくばんこくのはるが呉昌蹟ごしやうせきの木蓮もくれんと鉢合せはちあはをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎らうたう氏の油絵の風景画が、東側の壁には斎藤与里氏さいとうよりの油絵の艸花くさばなが、さうして又北側の壁には明月禪師めいげつぜんじの無絃琴むげんきんと云ふ艸書さうしよの横物よこものが、いづれも額になつて挂かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶どうへいに梅もどきが、或は青磁せいじに菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ転まじなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙からかみも何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処ここは板敷で、中央に拈ひげた方一間はういつけんあまりの古絨毯ふるじゆうたんの外ほかには、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁にはうには、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床ゆかの上へ積んである数かずも少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸ちくだの法帖ほふてふだの画集だのが雑然うづたかと堆うづたかく盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯ふるじゆうたんも、四方に並べてある書物のおかげで、派手はでなるべき赤い色が僅わずばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さい紫檀したんの机があつて、その又机の向うには座蒲団ざぶとんが二枚重ねてある。銅印どういんが一つ、石せ

印きいんが二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶筴ちやき、その中の万年筆、それから玉ぎよくの文鎮ぶんちんを置いた一綴ひとつづりの原稿用紙——机の上にはこの外ほかに老眼鏡らうがんきやうが載せてある事も珍しくない。その真上まうへには電燈くわうくわうが煌々たぎと光を放つてゐる。傍かたはらには瀬戸火鉢せとひばちの鉄瓶てつびんが虫の啼なくやうに沸たぎつてゐる。もし夜寒よさむが甚しければ、少し離れた瓦斯ガス煖炉だんろにも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机うしろの後、二枚重ねた座蒲団の上には、何処どこか獅子ししを想はせる、背せいの低い半白はんぱくの老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本たうほんの詩集ししふを翻ひるがへしたりしながら、端然たんぜんと独り坐つてゐる。……

漱石山房そうせきさんばうの秋の夜は、かう云ふ蕭條せうでうたるものであつた。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京小品

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>